日英の国語及び英語学力試験の相違に関する考察：日本人子女の英国教育実体験を踏まえて

清水　英之・谷村　玲子

本論の考察は日本の英語教育を改善したいという動機から始められたものである。筆者の一人、清水は、先に本学紀要（13、14、15号）で英語の発音について考察し英語教育の改善案を提示した。しかし、英語の発音教育の改善は、英語学習にとって極めて重要であるが初めの土台を構築するに過ぎない。何かもっと重要な課題が残されているという悶々とした思いに駆られていた。

本論のもう一人の執筆者である谷村氏は、ご子息を8才から英国で教育された。谷村氏の英国での希有な経験を知るにつれ、日本人が英語習得するためには英国や米国で何年か留学すればよいのだなどという安易な英語教育論に強く危惧を抱くようになった。日本人には英語の発音という困難な課題があるばかりではなく、まったく異文化と言える別な課題があることに気づけた。それは「記憶する」学習ではなく「考える」学習の差である。本論は、この「記憶する」学習と「考える」学習の差を実証的に明確化しようとする。

この論の第1章では、英国の一般的な教育方針を確認する。第2章では、日本人子女の英国教育の実体験を紹介する。第3章では日本と英国の国語学力テストを比較し、その特徴となる差異を浮き彫りにする。第4章では日本の英語教育に必要な改善案を提示する。

中央教育審議会の提言にも「考える」「考えさせる」教育の改善が謳われている。このまさに「考える」プロセスこそ、英国流の「考える」プロセスと比較して、差異を確認し、日本の英語教育が徐々にでも導入していかなければいけない改善点である。また、その差異こそが日本の英語教育を空しい結果に終始させている要因だと思われるのである。

第1章　英国の教育方針

日本の英語教育が有益なものとなるよう改善する新たな方法を見出すためには、英国の英語教育の実際を見てみればよい。この章では先ず英国の教育方針の大枠を理解する。

1　イングランドの教育制度

英国にはイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドで教育制度に若干の違いがある。ここでは、特にイングランドの教育制度を例にし、日本との大きな違いを確認してみたい。

英国には日本と違って卒業という制度はない。卒業制度ではなく、全国統一試験（科目ごとに行われる検定試験）を受け、資格を取得することで学歴を証明していく。教育の目的は、個々の違いを尊重し、各人が自分の道を自分で選択する力を自然につけることである。また、教育内容は1988年の教育改革法により制定された「ナショナル・カリキュラム」によって必修科目とその内容が定められている。ここで日本との決定的違いは、英国は国民に義務教育を受ける機会を保証しているが必ずしも決められた期間内に卒業しなければならないという期限はないということである。義務教育ではあるが「強制」ではないと理解できる。そこに教育を受ける側の「自由」が認められていると思われる。

2　公立学校（State School）

イングランドには日本同様、公立学校（無料）と私立学校（有料）がある。ここでは公立学校について大まかな理解をしておこう。

初等教育（Primary School）は5歳から始まるが、その前には保育園（Nursery School、2～4歳、無料）がある。いわゆる義務教育は初等教育と中等教育（Secondary School）であり、学齢は以下のキー・ステージ（Key Stage）に分かれている。

キー・ステージ1	5歳～	初等教育 （Primary School）
キー・ステージ2	7歳～	
キー・ステージ3	11歳～	中等教育 （Secondary School）
キー・ステージ4	14歳～	

各キー・ステージ終了時に全国レベルの学力テストが行われる。中等教育に入る時、イレブン・プラス入学試験（11^{+} Entrance Examination）があり、この成績の結果、入学する学校を選択できる。16歳になるとGCSE（General Certificate of Secondary Education）という義務教育修了試験を受けるが、受験義務はない。ゆえに義務教育とは実質的に16歳までと理解できる。GCSE受験後は、実質的に大学進学を目指すためのシックス・フォーム（Six Form）と呼ばれる受験コースがある。

3　私立学校（Independent School）

イングランドには公立学校の他に私立学校があり、言うまでもなくパブリック・スクールは伝統的私立学校である。パブリック・スクールの教育は18歳までであるが、開始年

齢は11 ～ 13歳の間であることが多い。当然、GCSEを受験し、シックス・フォームを併設している。ゆえに、パブリック・スクールは全員が大学進学を目指していると理解できる。

4　個人主義の教育制度

上記のような教育形態のプロセスの中で実際の教育が行われるが、教育の目的は何であろうか。英国の教育は外国から高い評価を得ているという記事を目にするが、その長所と思われる特徴を以下に取り上げてみたい。

4-1 「プロジェクト」という教育方法

黒岩徹著『豊かなイギリス人—ゆとりと反競争の世界』（中公新書）で「プロジェクト」という教育方法を紹介している。「イギリスの学校を回っているうちに、日本にはない教授法を見つけた。「プロジェクト」と呼ばれる教授法である。一つの題目を生徒が自分自身で選び、それについて数週間あるいは1学期間かけて調べ、書き上げるのである。大学の卒業論文と思えばいいかもしれない。それを小学校一年からやるのである。」（96ページ）これが現実ならば、日本の大学生は劣等感のようなマイナスの感情を抱き、自尊心を傷つけられないだろうか。

4-2 「なぜ？」を追求させる教育

前書では、「なぜ」を追求させる教育に注目している。「知人の娘はプロジェクトを進めていたとき、歴史の中に生きた人間を見つけた、という感動を味わったのだろう。それは、彼女が「覚えること」をではなく、「なぜ」を追い求めたからである。ロンドンの公立中学校パーク・ハウス・ミドル・スクールのキング校長は「イギリスの教育で最も大事なのは、“なぜ”を追うことだ」といった。まず子どもたちに疑問を抱かせる。そしてその疑問の解明が授業となる。」（101ページ）

4-3　考えさせる教育

同じく前書は、「考えさせる」教育を英国でどのように行っているかを示唆している。

「「なぜ」だけでなく、「いかに」もまたイギリスの教育の中で力点が置かれていることを知った。パブリック・スクールの名門イートン校でコリン・クック教諭に聞いてみた。

——この学校の授業ではどんな教え方をするのですか。

教諭　いや、ここは教える場でなく、教育する場です。

——わかりました。ではどうやって教育するのですか。

教諭　事実を与えても、考え方は教えません。必要な事実を提供して、ここからいろいろな考え方を学ばせるのです。あるいは事実を与えてそれをどう解釈するか、どういう方法で事実を調べていくかなど、自分の力で発見させるのです。子供にとって与えられることにではなく、自ら発見することに教育の意義があるはずです。
――抽象的にはあなたのおっしゃることはわかりますが、具体的な例を示していただけませんか。
教諭　たとえば地理の学習では、クラスを三つあるいは四つに分けて、「ある特定の地方で小麦を生産するときなにが問題となり、その問題をどう克服すればよいか」という設問を出します。一つのグループは、土地の高低や水といった物理的要因を重視して考えるかもしれません。別のグループは、どれだけの収穫高とどれだけの利潤があるかといった経済的問題に目を向けるでしょう。また別のグループは、労働力を確保するためにどうすればいいか、ストライキはないか、補助金が政府からくるか、といった政治的社会的問題に興味をもちます。それぞれのグループ内で議論させ、調べさせ、それらをまた全体で討議させるのです。
――そうした場合、正解を出すのがむずかしくありませんか。
教諭　議論の中で事実が違ったとき、主張が論理的におかしいときに助言をします。あるいは議論が行き詰まったとき、新しい討議の材料を提供するためにヒントをだします。だから正解はこれだと決めつけることはしません。正解に至る道が大事なのですから。いや、正解だって一つとはかぎりません。だから、自分で問題を発見し、自分で思考を組み立てることが最も大事なのです。教えるものが一番してはいけないのは、考え方の善し悪しを決めてしまうことです。これがいいとか、悪いとか。子供たちに自分で考えさせることです。自分でね。」（102 ～ 104ページ）

上記の引用で、「自分で問題を発見し、自分で思考を組み立てる」という文言は日本でもよく言われることなので、日本の教育は英国流にシフトしているように理解できる。しかし、「教えるものが一番してはいけないのは、考え方の善し悪しを決めてしまうことです。これがいいとか、悪いとか。」という認識は日本の教育と対立する点ではなかろうかと推測される。

4-4　自己の能力を育てる教育

さらに前書では、自己の能力を育てる方法を示唆している。

「イギリスに赴任してきたばかりの日本人商社員に小学校五年生になる娘さんがいた。娘さんは近くの公立学校に入学したが、英語だけをならう特別クラスに入れられた。英語ができないから、特別強化授業で早く英語を習得させようとする学校側のはからい

だった。ところが、いっしょに同じ特別クラスに入ったスイス人、フランス人の女の子たちは、彼女たちの使うフランス語と英語の類似性のために上達が早く、数か月すると特別クラスの必要がなくなり、普通クラスに編入された。これを見て日本人の彼女はショックを受け、学校に行くのが嫌だといって泣き出した。両親は困ったあげく、娘とともに教師に相談に行った。

教師は初め、なぜ彼女が泣いたのか全くわからなかった。両親からスイス人、フランス人との競争に負け悲嘆したと説明されて、教師は唖然とした。想像もしない理由だったからである。教師は娘のいままでのノートや成績を見せながらいった。「なんで他人のことがそんなに重要なんですか。あなたは入学したときよりこんなに伸びてますよ。こんなに進歩したことはあなたにとってすばらしいことじゃないですか。」ハタと娘は気がついた。教育にとって重要なのは、人との競争ではなく、自分の進歩である、と。「あれ以来、娘は学校が楽しくなり、喜んで通っています」と親は嬉しそうな表情を見せた。」（106 ～ 107ページ）

上記の事例を読めば、誰でも納得してしまうのではないだろうか。筆者の授業でも学生に上記の引用を紹介すると学生たちから肯定的なコメントが返ってくる。特に「教育にとって重要なのは、人との競争ではなく、自分の進歩である」という認識は目からうろこ的衝撃を与えるようである。

以上、第1章では、イングランドの教育制度と教育の目的や方法について大まかな理解を試みた。日本と比較すれば、日本には欠如していると思われるような教育の自由度と理想的とも思われる教育のあり方に気づけたのではないだろうか。

第2章　英国教育の実際

第2章では、谷村氏がご子息とともに体験されたイングランドでの教育経験を紹介する。第1章で紹介したイングランドの理想的とも言えそうな教育の実際はどうなのだろうか。日本人がその教育を受けることに関して示唆に富むことが多い。比較という観点からも非常に有益となろう。以下は、谷村氏の執筆である。

夫が突然に英国転勤を命じられたのは、1998年の春のことであった。長野オリンピックが開催され、また日本がサッカー・ワールドカップに初出場した年である。夫は2週間後に赴任したが、私は息子が公立小学校三年生の一学期を終えるのを待ち、8月1日に英国に渡った。その後に様々な紆余曲折を経て、息子はプレップ・スクール、そして14世紀に創立された英国最古のパブリック・スクールに入学することとなった。

海外で同様の教育を選択する家庭の中には、明確な目的を持って子弟を私費留学させる富裕家庭もある。また国際結婚した女性の英国教育記を目にすることもある。しかし一駐在員にすぎない我が家の場合は、息子の海外教育に具体的なビジョンがあったわけではない。いくつもの偶然と幸運な出会いもあった。しかし何よりも、「英国人同級生と同じように学校を楽しみ、勉強しなさい」と息子を励まし続けたことが、こうした選択に繋がったのである。その結果が息子を英国での競争に参加させることになり、親は学齢の切れ目ごとに悩み苦しみ悪戦苦闘することになった。共同執筆者である清水氏の強いお薦めで、この章を担当するものの、私個人は英国の教育を礼賛するつもりも、パブリック・スクールを最善とする気持ちもない。ただ大学という日本の教育の場に携わる者として、我が家の体験が何らかの参考になれば幸いと願うばかりである。

なおパブリック・スクール入学は、まず11歳までにプレイスの獲得、スカラー試験か一般的なコモン・エントランス試験を受験し、面接を経て、最終的に入学が許可されるという、複雑な過程を取る。パブリック・スクールについては、学校ごとの特色もあり、また清水氏と共に別稿で述べることになると思う。

1　海外での長期教育の危険

夫の英国駐在はまったく予想外の突然のことであった。歴代同職の先輩達の駐在期間は、6年から10年と長期間だった。しかし夫の場合は10歳近い若返り人事で、まったく予想ができないとのことであった。

赴任地からロンドン日本人学校への通学は距離的に難しく、現地校入学しかないことがわかった。そこでまず私たちは、日本の小・中・高等学校の関係者達に助言を求めた。「大学までは日本の教育程度の方が高い」、「日本人学校に通わせて、海外から日本の中学校受験を考えよ」、または「日本に残り中学受験をめざし、私立中学入学後に1、2年渡英させよ」、「途中で日本に帰すべきである」、「日本人でなくなってしまう＝日本に戻れなくなる」。もっとも極端な意見としては、「中学二年で帰国し、まったく学校には行かずに高校入試に備える」というものもあった。日本で得た助言のどれもが、異国で長期教育することのマイナスを指摘していた。

2　小学校入学

本稿の別章にもあるように、英国では5歳から16歳が義務教育にあたる。英国人の大多数は、5 ～ 7歳 幼稚園、7 ～ 11歳小学校、11 ～ 16歳中学校、そして16 ～ 18歳の2年間の高等教育（シックス・フォーム）を経て、通常は18歳で大学入学となる。しかしこれとは別に、全学校総数の約1％に過ぎない数であるが、13 ～ 18歳のパブリック・スクールがある。男子校ならば、例えばWestminster、St. Paulといったロンドン市内の学校を除き、多くのパブリック・スクールは基本的に寄宿制を取っている。そのためパブリッ

ク・スクールを目指す子供は、11歳から2年間の寄宿生活が義務の私立小学校、通称プレップ・スクール（予備学校）に入学するのが一般的である。

夫の赴任地はロンドンから40分ほど西に行った住居地域で、私立の小学校が多数ある地域だった。私立の方が外国人の受け入れに慣れているように思われ、飯田橋のBritish Council図書室で、「英国学校案内」から地域の私立小学校7校を選び、入学志願の手紙を出した。しかし2校をのぞいては、英語のできない子は受け入れられないとの返事であった。2校は共にプレップ・スクールで、英語習得の為に渡英直後からの寄宿生活を勧めてきた。悩んだ末に、日本人の子供を毎年受け入れている通いの男子私立小学校に入学を決めた。小・中学とシックス・フォームを備えた一貫校で、小学校は少し離れた場所にあり、1学年2クラスで一クラス20人程度の小さな学校だった。私たちの渡英当時は、電機や車の製造業種の日本人9家族の子供たち11人が在校中で、各家庭の駐在期間は5年位とのことだった。夫の同僚に同じ位の年齢の子供を持つ日本人がいなかったので、こうした日本人家庭の存在も心強く思われた。

英語に関しては、前もって学校に願い出て、到着の直後から週一回の英語レッスンを受けることができた。息子には「May I go to toilette, please?」だけを教えて、レッスンに出した。教師は五十代の女性小学校教諭で、フラッシュカードで英単語の発音を学んだ。フォニックスを取り入れながらも、教師の経験に基づく一般単語の習得と思われた。経験豊かな、しかし愛想の無いイギリス婦人だったが、不思議に息子とは相性が良かったようだ。九月半ばの新学期の初日の朝、息子はまさに彼女のスカートを掴んで段の上に登った。息子は一年後に転校するのだが、転校後も助けを求めた時は、彼女は必ず息子を助けてくれた。

3　はじめての学校生活

学校では通常の英語の時間は、一対一の特別英語クラスに行き、そのほかの授業は同級生と一緒だった。9月からの特別クラスでは、発音とスペリングを習い、一回に15から20の単語を三回ずつ書く。例えば9月21日の初回はknot、knob、knock、glossy、loss、plop、log、spot・・を練習したようだが、息子の字は幼児のいたずら書きのようである。しかし2ヶ月後の11月16日は-ayの綴りで、play、away、pray、always、stay、way、today、jay、may・・息子の字は英国風筆跡に変わってきている。

歴史は他の生徒と同じクラスで、教科書は無く授業ごとにプリントをもらい、ノートに貼るという形式だったようだ。ノートの始まりは、Invaders and Settlers Timelineおよび The Growth of the Roman Empire の挿絵の色塗り。次回の9月23日は初めて黒板を写したのだろう、Produce–wool, leather, corn fruits. Metals- gold, cooper, tin, silver and lead・・略・・と4行あるが、判読できない字もある。

授業が進んだ10月の終わりには、ローマの公共風呂に関する七つの場面が与えられ、

クイズに答える問題が出た。1. Julius and his father take off their clothes in the changing room. 2. They play handball in the exercise yard. 3. They have a rest in the warm room (called the Tepidarium)・・略・・。 各文章には挿絵が付き、またローマの公衆風呂の室内図には、息子の手で着替え室からプールまでの移動の線が入れてある。クイズは空欄に言葉を入れる問題であった。My father took me to the baths. We went into the _____room and took off our _____. Father told me that sometimes thieves _____things from the changing room. Next we went into the exercise yard. We played _____. Then we had a_____ in the warm room. This is called the _____. ・・略・・。 その後の授業からも、ローマ時代の服装、住居、食べ物、習慣を学び、簡単な創作会話を挟みながら、具体的なイメージを持たせようという目的が感じ取れる。英国では社会史が進んでいるが、小学校の歴史教育も、単に歴史を量で記憶させるのではなく、その時代を総合的にイメージさせ、理解させようとするものであった。

息子にとって歴史は楽しかったのだが、すべての教科が順調だったわけではない。英国では算数はふたケタ足し算引き算を学習中で、確かに日本の方が進んでいるように思えた。ただし息子は英語の文章問題ができない。担任の教師でさえも、文章題の不出来は英語の理解力にあるとは、気がつかない様子だった。そこで自宅での英語の勉強は、市販の英語の算数文章問題集を親子で解くことにした。この学習法は一石二鳥で、非常に効果的であった。しかし一月に入ると、学内で朝食のメニューや兄弟の数を聞き取り調査し、グラフを作るグループ・プロジェクトが始まった。担任は息子に良かれと、優等生四人組のグループに息子を入れてくれた。ところがまだ話すことが出来ない息子は、「インタビューできないバカ」、「邪魔」、「まとめの相談もできない」等々とすべての過程で排除され続け、プロジェクト完成時には名前を除外される事件に発展した。小学校のレベルでのグループ学習は、まだ語学が充分でない場合には、成績優秀者と組むことは必ずしもプラスではなかった。同じような経験は転校した学校でもあったので、息子一人の固有の体験ではないと思う。逆にフランス語の授業は、それまでのお遊びの単語ゲームから形容詞を学び始める移行期だった。既に外国語（母国語とは違う言語）という概念が入っている息子にとっては、理解しやすかったようだ。クラスの英国人とほぼ同じスタートに立てる喜びで、とても楽しそうにしていた。

英語が出来ない日本人の子供でも、テニスの得意な子はテニス部に入部するなど、スポーツを通じて、異国で楽しく学校生活を送る子もたくさんいると思う。英国ではスポーツ選手は学校の華であり、どの学校でもスポーツに力を入れる。息子が入学した時は、丁度“ラクビーもどき”の授業が始まったところだった。教師がボールを蹴り上げ、生徒は教師の指示に従って校庭を走り回るだけなのだが、息子は英語の指示がまったくわからなかった。当時息子は身体が小さく運動能力にも恵まれず、本人は一生懸命なのだ

が、「参加意欲に欠ける」と体育の評価は低かった。

あまりスポーツをしない我が家では、まだ本も玩具も届かず友達も無い夏休みの間、可哀想に思った夫が毎夕食後に息子にチェスを教えていた。英国で手に入りやすいゲームで、夫もルールを知っていた、ただそれだけでのことである。ただし幸運なことに、前述の夏の特別英語の教師がチェス･クラブの顧問だったので、息子は新学期早々にチェス部に入部できた。英国の書店に行くと、チェスの本はスポーツ・コーナーにある場合が多い。試合に勝つとトロフィーがもらえ、特に学外戦に勝つと（スポーツ選手のように）朝礼で特別に名前を呼ばれる。チェスは語学を必要とせず、体力差も関係なく、息子はハンディを抱えずに楽しめたようだ。

もう一つ幸運だったのは、ヴァイオリンの先生に恵まれたことだった。英国ではほとんどの学校で、学内で音楽の個人レッスンを取ることができる。様々な楽器を習えるが、たいてい外部の音楽家がアルバイトで来るので、週1回のレッスンの時間には授業を抜けなくてはいけない。日本でも習っていた息子は、英国でもぜひ続けたいという。両親は大いに悩んだのだが、BBCの現役楽団員という先生の評判に、ともかく1学期だけでも‥と、習わせることにした。「ママ、ヴァイオリンで先生と好きにお話できた！」と、初レッスンの日に興奮して下校した息子の笑顔を忘れることができない。

この時点ではまったく予測できなかったことだが、算数とチェスとヴァイオリンは、息子のその後の学校生活に大きな影響を与えることになる。

4　転校

同じ学校に通う日本人家庭は駐在期間が長いだけに、学校内に小さな日本人コミュニティが出来上がってしまい、子供は日本人同士で遊んでしまう傾向が見られた。さらに日本人学校に通わせる父兄以上に、各家庭の教育方針が違ったことも事実である。例えば一人の生徒は日本での中学受験を目指し、登校はするものの一切現地の勉強はせず、週3回のロンドンの塾の勉強を優先させていた。この例は極端ではあるが、「現地校は英語を学ぶだけの場所で、他の教科を勉強する場所ではない」、「勉強は家庭で日本語教材でするもの」というご家庭が多かったと思う。息子が通った小学校では、日本人はその付属中学校に自動的に進学できることも、そうした傾向を強めたと思われる。

一方で学校側は子供の理解力を測る国家レベルの試験Key stageや、中学校進学を左右するEleven plusといった試験は、日本人の生徒には受験させたくないとはっきり表明していた。学校全体の点が落ちてしまうからという理由であった。Key stageはともかく、この学校では、優秀な英国人の生徒ほど他中学校を受験する傾向があり、8歳の段階でも、できる子供の親は上級生のEleven plusの成績を噂していた。

当時はブレア政権で、ブレア首相は就任の時に「教育」を強調し、大学進学を奨励し続けた。それはおのずから英国に競争を持ち込むことにもなった。本稿でも紹介した『豊

かなイギリス人—ゆとりと反競争の世界』は「ゆとり」に注目しているが、実は英語力が充分でない場合は、英国では教育競争には入れないことも示唆しているのである。

英国では就職の際の正式のCV（履歴書）に、16歳で受験するGCSE（義務教育修了試験）の成績を記入することが一般的である。16歳の試験結果が一生ついて回るとなると、進学する付属中学校が大変不安に思えてきた。我が家は同中学校のすぐそばで、毎日のように生徒達を見ていたからである。数少ない日本人在校生は全く問題はなかったが、現地生徒の質には大きな疑問があった。個人差はあるものの、全体に十代特有の覇気が感じられず、言葉や態度そして服装の乱れも気になった。卒業後の大学進学率にも問題があった。しかし息子は、3年後のEleven plusで良い点が取れるほどに英語力が上がるだろうか、との不安はあった。また英語ができなくても、学校が好きで勉強を楽しんでいる子に、Eleven plusを目標に勉強させることは、本末転倒のような気もした。

一方で秋が深まるにつれ、私は体調を崩し、年明けには日本での手術を勧められた。息子の担任に相談すると、「英語を話し始める時期。子供を英国に置いて帰国しなさい」と強く言われた。夫は出張が多く、息子の世話は無理であった。有難いことに、英国人の二家族が預かると申し出てくれたが、日本での入院が何ヶ月になるかわからない。できるだけ子供の環境は変えたくない。何かの時には子供を学校に預けられる体制を作っておくべきと、私は強く思った。そして手術のための一時帰国を計画する中で、寄宿舎のある小学校すなわちプレップ・スクールの存在を知った。プレップ・スクールは海外寄宿生も多く、願い出れば一時的な寄宿も許される。しかもパブリック・スクール入学は13歳からなので、11歳のEleven plusは受けなくてすむ。受験期限が延びることで、息子はもっと気楽に学校生活を楽しめるとも思った。1月に息子とあるプレップ・スクールを見学し、案内してくれた最上級生の雰囲気が非常に良かったこともあり、ともかく2月の転校試験を受けることにした。

転校試験ははじめに算数の試験があり、その後に受験者達の集団自由行動が観察され、最後に校長との親子三者面接があった。校長面接で「What subject do you like best? 」と聞かれた息子は、何も答えることができなかった。無言で哀しげに頭を振る校長に、夫と私は転校が時期尚早であったことを思い知らされた。ところが、1週間後に来た結果は合格。算数はともかくも、天気が悪かったので室内での自由行動の中、息子はチェスをしていたらしい。試合には慣れているので、負けた子供たちにも優しかったそうだ。また音楽室見学の際には、幸運と大変な偶然が重なって、伴奏者付きでヴァイオリンを弾くことができた。こうした報告が校長に上がった結果、英語の特訓を条件に、9月からの合格が許可された。

この時点で夫と私は、パブリック・スクールへの進学を目的としていたわけではない。そのためにプレップ・スクール生活が始まるや、予期せぬ新たな問題が続出した。パブリック・スクール受験は、日本の中学受験とは異なるもの、やはり一種の受験戦争であっ

た。そしてプレップ・スクールとは、そのための学校だったのである。

以上、谷村氏の希有な英国教育体験を紹介していただいた。英語教育に携わる清水が特に衝撃を受けたのは、英語での意思疎通ができないと本人の人格まで否定される事態が起こるという事実であった。また、日本人にはキー・ステージやイレヴン・プラスを受験させないという断固とした学校側の態度が日本人から選択の自由を奪っているという事実であった。むしろ、激しい受験戦争が存在する事実を知ることとなり、一般に言う日本人の英国留学とは単に英語に慣れさせるだけだったのかという一種の空しさを覚えた。英国にとって日本人留学生は所詮お客様なのだ。英語ができないからなのだ。

第3章　日本と英国の国語学力テストの比較

この章では、実際の学力試験を取り上げて日英の国語教育に見られる違いを確認してみよう。

1　日本の国語学力試験に見られる出題傾向

日本語教育における学力試験は調査するまでもなく、日本人なら誰しもが経験しなければならない。ゆえに、ここでは誰しもが知っている事実を確認するだけになる。例として、平成26年度全国学力・学習状況調査小学校第6年国語Aの出題傾向に注目する。

1-1　全国学力・学習状況調査小学校第6年国語Aの出題傾向

ここで、上記試験の設問文の出題傾向を例示してみる。

(1)　漢字の読みをひらがなで書かせる
(2)　単文中のひらがなの部分を漢字で書かせる
(3)　故事成語（五十歩百歩など）の正しい使い方を三つの選択肢から選ばせる
(4)　会話などの話のやり取りを正しく理解できているかを四つの選択肢から選ばせる
(5)　新聞の読者の投書がどのような意図で書かれているか正しく理解できるかどうかを四つの選択肢から選ばせる
(6)　3人の会話を読み、主語は誰かを正しく理解できるかどうか四角の空欄に3人の名前を書かせる
(7)　短い文章を読ませ、間違っている接続詞の部分を書き直させる
(8)　文の前後から正しい接続詞表現を五つの選択肢から選ばせる
(9)　黒板に書かれた議論の記録を見せ、そのまとめ方を正しく理解しているかどうか四つの選択肢から選ばせる

（10）短い文章の中でひらがなで書かれた動詞の使い方が同じものを四つの選択肢から選ばせる

以上の設問を見ると10問中6問が「選ばせる」問題であり、「書かせる」設問は4題あるが文章を書かせる意図ではないことが理解できる。

1-2　中学受験の国語の問題集の出題傾向

ここでは市販されている国語の問題集から長文問題の設問傾向を例示しよう。試験時間は50分である。

（1）　長文の中で空白になっている4カ所に適切な接続詞を選択肢の中から選ばせる
（2）「つい」という副詞が修飾している表現を四つの選択肢から選ばせる
（3）　慣用句表現の空白部分を四つの選択肢から選ばせる
（4）　本文中の助動詞の使い方と同じ使い方の文を四つの選択肢から選ばせる
（5）　本文中の語句の正しい説明を四つの選択肢から選ばせる（2問）
（6）　本文中の語句の内容を説明している文章の「はじめ」と「終わり」の5文字を書かせる（2問）
（7）　本文中の表現を説明する文を読ませ、四つの空白に本文中から適切な表現を抜き出して書かせる
（8）　本文中の表現を説明する部分を本文中の語句を引用させ指定された文字数の範囲で書かせる
（9）　本文中の空欄に当てはまる漢字を書かせる
（10）本文中の説明の部分の理由となる部分を抜き出し「はじめ」の5文字を書かせる
（11）本分の内容に合致している文を四つの選択肢から選ばせる
（12）話し言葉の違い（標準語、方言など）を認識させ書かせる
（13）漢字の構成の違いを認識させるため五つの選択肢から選ばせる
（14）登場人物の仕草の意味を指定された字数内で書かせる
（15）登場人物の気持ちを指定された言葉を用い、指定された字数の範囲で書かせる

上記17問の内、「選ばせる」問題が8問、「書かせる」問題が9問となっている。

以上の検討で理解できることは、選択問題と記述問題を比較すれば選択問題の方が多いという事実である。それでは英国の英語試験はどうであろうか。

2　英国の公立学校における英語学力試験に見られる出題傾向

日本の中学校入学試験に相当する英国のイレヴン・プラス（11+）試験の問題集から一例を抽出し検討をしてみよう。この試験は英国の11才からの中等教育を受けるための実力試験である。

2-1　出題文のジャンル

出題文のジャンルはエッセイ、小説、日記、詩、新聞記事、インターネットの記事など多岐にわたって出題される。以下に出典例を示す。

（1）　The *Phantom Tollbooth* by Norton Juster
（2）　Article from *Guardian* by Julie Reid
（3）　The World below the Brine by Walt Whitman
（4）　An extract from ‘Sea’ by Brendan Kennelly
（5）　From *Alice's Adventures in Wonderland* by Lewis Carroll
（6）　From The Diary of Anne Frank
（7）　From *The Turbulent Term of Tyke Tiler* by Gene Kemp
（8）　From ‘Gus the Theatre Cat’ by T S Eliot
（9）　From Nathalie Sergheiew alias Treasure（www.nationalarchieves.gov.uk/spies）

2-2　出題文の語彙数

上記2-1の（5）における語彙数：583語
英検3級の長文問題語彙数：250語前後
英検2級の長文問題語彙数：400語前後
TOEICの文章問題語彙数：150語前後

2-3　問題文の例

以下に、2-1の（5）における実際の問題文を列挙してみよう。出題数は1 ～ 100で示し、出題数は100問である。

（1）　Underline the right answers
1 The little bottle（did/didn't）have the label ‘DRINK ME’.
2-3 Who had been ordering Alice about?
（her mother, rabbits, fairies, mice, an old woman）
（2）　Answer these questions.
4 Which line in the passage suggests that Alice is not her normal size?
5-6 Is Alice worried about the rate at which she is growing?　Find evidence in

the passage to support your answer.

7-8 Give two reasons that explain why life was more pleasant at home for Alice.

9 Why do you think Alice might always have lessons to learn?

10-13 Alice debates with herself the pros and cons of never getting older (line 31). Write two good things and two bad things about never getting old.

14-15 What do you think Alice felt at the end of the passage as she stopped to listen? (line 38) Give two answers.

(3) Write the following nouns in their plural form.

16 kangaroo 17 atlas 18 deer 19 knife 20 mosquito 21 louse 22 ox 23 chief

(4) Change the following sentences into reported speech.

24 Tom said, "I'll do my homework after I've watched television."

25 "I forgot to buy Sheena a birthday card," Amanda exclaimed.

26 "Would you like to play football, Tim?" Tony asked.

27 "I'm afraid," Nan said, "it is time to go home."

(5) In which tense is each of these sentences written?

28 He is running to school.

29 They will meet at the clubhouse.

30 Andy fell out of the tree.

31 Ling swan this morning.

32 Cats often catch mice.

33 They are eating their breakfast.

34 Trisha laughed at the clown.

(6) Use each word in a sentence to show its meaning. You can add suffixes to them.

35 fatigue 36 official 37 precarious 38 renovate 39 pedestrian 40 submerge

(7) Choose the correct verb form for each of these sentences.

41 Kate (was/were) very happy on holiday.

42 They (is/are) unsure whether to go to Pete's house.

43 Meena and Tuhil (was/were) very excited about Diwali.

44 The goat (eat/ate) its food.

45 Hannah (drink/drank) the bottle of ice-cold water.

(8) Complete each sentence as a metaphor.

46 The sea is a raging ⋯. 47 The snow is a soft, white ⋯. 48 The sun was a golden ⋯. 49 The clouds are soft, fluffy ⋯. 50 The wind is a howling ⋯. 51 The stars were glittering ⋯ in the sky.

(9) Rewrite the misspelt words correctly.

52 temprature 53 seperate 54 sacrifise 55 goverment 56 necesary 57 vegtables 58 dictionery 59 disasterous 60 libaray

(10) Form adjectives from the words in bold.

61 **sense** She gave a …… reply.

62 **Greece** The …… olives tasted good.

63 **study** He is a …… boy.

64 **energy** It was an …… dance.

65 **angel** She had an …… voice.

66 **Switzerland** …… clocks are very reliable.

67 **triangle** It was a …… piece.

(11) Punctuate these sentences correctly.

68-74 peter called im ready

75-82 when will we get to davids house jake asked

83-92 quick yelled sam we will miss our train

(12) Write two meanings for each of these words. One might be a meaning that has evolved over recent years.

93-94 cool

95-96 trainer

(13) Write four words that begin with a hyphenated prefix.

97-100

以上、100問を列挙してみた。100問中選択問題は7問であり、93問は全てが記述式である。解答の制限時間は50分であるから、受験者は試験時間中書き続ける状況となろう。

3 英国の私立学校の英語学力試験に見られる出題傾向

ここでは谷村氏が入手された英国の私立学校が実施している13才での入学試験の英語問題の傾向について検討する。私立学校の入学試験はISEB（Independent Schools Examinations Board）により統一した試験問題で実施されている。本論で検討する英語の試験はCOMMON ENTRANCE EXAMINATION AT 13+の問題であり、以下のような構成になっている。

(1) PAPER1：試験時間50分、事前に5分間の読書時間が許されている。3部構成に分かれている。全ての問題に解答することという指示がある。手書きの解答が重要であると示唆されている。

(2) PAPER2：試験時間50分、事前に5分間の読書時間が許されている。2部構成に

分かれている。第1部に25分、第2部に25分の解答時間が割り当てられている。正しい綴り、文法、句読点等、表現法に注意し、語彙の多様さを示すことにより追加点が5点加えられるとの明示がある。手書きの解答が重要であると示唆されている。

(3)　PAPER3：五つの話題から一つ選択し、400 ～ 500字の範囲で作文を書く。試験時間は40分で、事前に5分の計画時間が許される。正しい綴り、文法、句読点等、表現法に注意し、語彙の多様さを示すことにより追加点が5点加えられるとの明示がある。

3-1　長文問題の語彙数

(1)　PAPER1：Passage A（55語）、Passage B（359語）

(2)　PAPER2：A Poem（45行、228語）

3-2　設問の例

(1)　PAPER1の3つのSectionに関する質問は以下の通りである。

Section A：5 ～ 10分の時間が割り当てられている。解答は長文の内容に即したものである旨の指示がある。

1. What is a simpler word for‘format’(line5)？
2. What does‘I have lost access to my work’mean (line)’？
3. ‘As I peered into the glass case　…’(line10). The journalist might have written‘I looked into the glass case’. What is the difference in meaning between‘peered’and‘looked’？
4. (a) Does the writer think that books or computers will last longer?
   (b) Write down a sentence or part of a sentence from Passage A which tells you this.

Section B：5 ～ 10分の時間が割り当てられている。長文の内容に即して、完全な文で答えるよう指示がある。

5. Write a careful explanation in about 20-30 words of what the writer means in lines 18-20.
6. ‘Lousy’(line25), strictly speaking, is slang.
   (a) What is slang?
   (b) What does the word‘lousy’really mean?
   (c) Replace‘lousy’with a non-slang word to keep the same meaning. Explain why you have chosen the new word.
   (d) Why might a writer deliberately use slang?

Section C：20 ～ 25分の時間が割り当てられている。問題文となっている二つの長文に即した手紙を地方紙の編集者宛に書かせる。以下のような指示がある。

either strongly making the case for increased spending on ICT in schools or strongly making the case that books and libraries are still essential and enjoyable for schoolchildren.

(2)　PAPER2の2つのSectionに関する質問は以下の通りである。

Section A：約25分の時間が割り当てられている。課題の詩を読み全ての設問に答える旨の指示がある。

1. Write down any two jobs grandma's hands had to do besides knitting.
2. Reread line 38. Why has the poet set out the line of poetry with the spaces like this?
3. In your own words, give reasons why grandma's family ask her to stop knitting clothes as presents for them.
4. In about 10 lines, explain in detail how the poet makes us focus on grandma's hands. Use quotations from the poem to illustrate your answer.
5. By referring to the poem and using your own words, explain how you can tell whether the poet is sympathetic or unsympathetic to grandma.

Section B：約25分の時間が割り当てられている。3つの課題から1つを選択し、文章を書く。二つ以上の文学作品に言及し、作品名を文の書き始めに明記する旨の指示がある。

1. Some of the most exciting characters in literature are rebels, who like to behave differently from people around them. Basing your answer on two or more texts you have studied,
   - ・briefly explain why characters rebelled
   - ・describe how others reacted to them
   - ・say which character or characters in the texts which you studied you preferred most, and why.
2. Write about two or more texts you have studied in which either a close friendship is put under strain, or difficult relationships between children and parents are involved.
3. With reference to two or more texts, show how writers deal with people whose customs and strongly-held beliefs are so different from one another as to cause serious problems. How do characters face up to the situations?

(3) PAPER3は作文の問題である。選択肢は以下の通りである。

1. Imagine that you are in a lift in a department store which breaks down between floors. After a few minutes of silence, everyone in the lift begins to realize that one person in the lift is very unexpected and very odd. Tell the story.
2. Write about why you do or not do like visiting your grandparents. Recount some actual happenings to justify your choice.
3. Write about a time when using a computer landed you or someone you know in trouble.
4. Write a debate speech either for or against the motion:
   'This house believes that books are better entertainment than television.'
5. Would you rather be a dog that is happy, or a human being who is unhappy? Why?

以上、英国の私立学校で実施された13才レベルの入試問題を一例とし検討した。その結果、以下のような事実が確認できた。

（1）　英語の試験だけで140分（2時間20分）かけている。
（2）　長文のトピックは新聞等の最新情報から文学作品（詩を含む）におよび広い範囲の分野を扱っている。
（3）　ディベートの能力を確認する問題が含まれている。
（4）　自分の考えを述べさせる問題が含まれている。
（5）　全ての設問が解答を記述させる問題となっている。

以上、第3章では日本と英国の各国語の試験を比較して検討を試みた。日本では小学校卒業程度、英国では11 ～ 13才レベルの試験問題を対象とした。その結果、明確な違いを確認することができた。それは、非常に単純であるが、同時に驚くべき違いではないだろうか。日本の試験問題は解答を「選択させる」傾向が強く、英国では解答を「書かせる」傾向が強いということである。この違いを踏まえて第4章の議論に進みたい。

第4章　日本の英語教育における改善案

上記三つの章で明らかになったことを踏まえて、日本の英語教育に限った改善点を考えてみたい。

1　選択問題から記述式問題へ

今回の考察で明らかになったことは、日本の国語試験と比較して英国の英語試験は記

述式問題が大半であるという事実である。単語から文章まで、とにかく書かせることで一貫している。この点、日本の英語試験、例えば英検（実用英語技能検定試験）は全てが選択問題である。これでは、単語レベルの読む、書く能力も測れない。文章作成能力など論外であると言わなければならない。英語を「実用」する能力を育成しようと改善するならば、単語から文章まで書かせる訓練を導入すべきという結論になる。

しかし、英語を書かせる訓練に問題があることも英語教師としての体験上感じざるを得ない。生徒が書いた単語のスペリングでさえ、教師がチェックし、生徒に書き直させるには手間がかかる。英作文となればもっと時間がかかるし、それこそ修正するための教師側の能力も問われる。このような時間がかかる英語教育を文部科学省の指導で改革していけるのか、それとも我が国の私立学校の目玉教育として特色を打ち出すか、現実には困難が伴うことは明らかである。個人教授なら簡単にできるであろうが。

2　記憶する教育から考える教育へ

「考える」「考えさせる」教育を今の日本が導入しようとしていることは事実である。しかし、今回両国の試験問題を比較検討した結果、考えさせる方法に違いがあることが理解できた。それは、考えて答えを選択させるか、考える過程を書かせるかという違いにある。特に英国の英語試験では、意見の証拠となる根拠を明記して論述させる意図がはっきりしている。また、二項対立的な異なる意見の双方の立場から論じられるディベートのセンスを養う意図が明確である。このようなディベート感覚の論理的思考を日本の中学校入学レベルで培うことが可能となるのであろうか。残念ながら現状では少なくとも大学院レベルの教育を受けないと日本では無理であろう。

静岡県のある私立学校で小学校から英語のネイティヴを教師に英語で教科を学ぶ授業が実践されている。マスコミでも取り上げられ、その成果は素晴らしいとの印象を与えているに違いない。静岡市では、その方法を導入する検討を始めたとテレビで報道していた。しかし、その試みは今の段階では困難と誰しもが感じると思われる。それでも、徐々にでも変革を望むなら、教科書を変えればよい。英国で行われている英語教育の教科書と問題集を使用し、こつこつと「書く」そして「考える」訓練を継続することならば可能である。

以上、可能な変革として、「選択問題から記述式問題へ」の転換および「記憶する教育から考える教育へ」の改善案を提示してみた。

まとめと今後の課題

本論では谷村氏の協力も得られ、日本と英国の語学教育を比較検討してみた。その結

果、日本は「記憶する」教育が中心であり、英国は「考える」教育が中心であることを明確化できた。その違いが生じるのは別段難しい要素ではなく、単に問題の出題傾向の違いであると結論できる。論拠を明示し自分の意見を書かせる訓練を徐々にでも導入すれば、日本でも英国流「考える」教育は可能となろう。

かつて科研費で調査のためロス・アンジェルスに立ち寄ったときのことを思い出す。日本人留学生たちが日本のコンビニに群がっていた。英語は身につきそうもないなと思えた。アメリカに行けば何とかなるというような安易な留学で英語は習得できないだろうに。ましてやイギリスでは無理だ。しかし、日本で出来る事もある。英語発音教育と英作文に時間をかけるべきであろう。こうした英語教育の変革が今後の課題となろう。